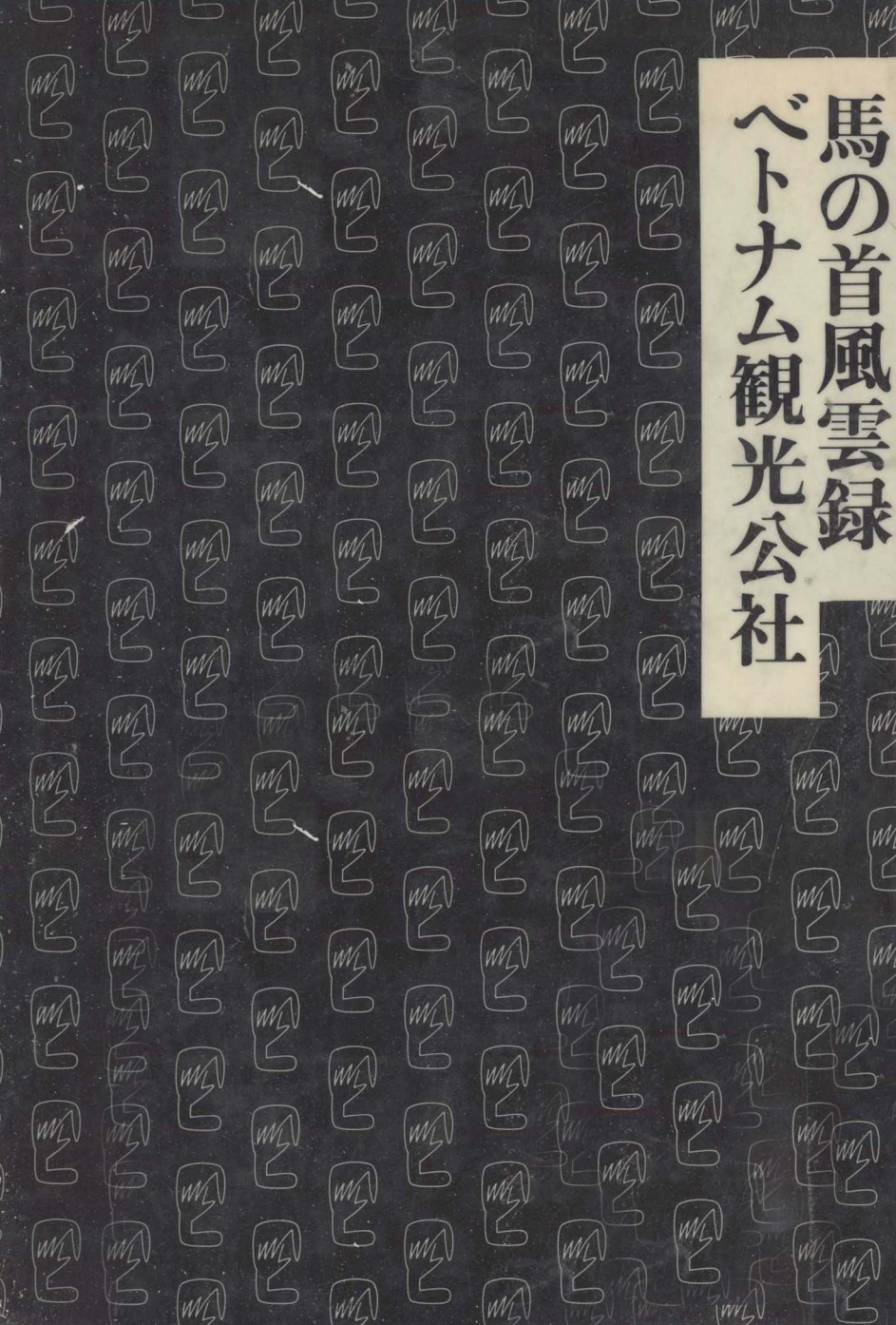


馬の首風雲録
ベトナム観光公社





筒井康隆全集 3

馬の首風雲録
ベトナム観光公社

新潮社

うま くびふうんろく かんこうこうしゃ
馬の首風雲録・ベトナム観光公社



筒井康隆全集 第3巻

昭和五十八年 六月二十日 印刷
昭和五十八年 六月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六〇)

電話 業務部 東京(〇三)二六六・五一一

編集部 東京(〇三)二六六・五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-644403-8 C0393

筒井康隆全集第三卷・目次

長 篇

馬の首風雲録

7

短 篇

産 気

227

サチコちゃん

233

ユリコちゃん

234

火星のツアラトゥストラ

235

くたばれPTA

248

最高級有機質肥料

255

猫と真珠湾

264

ひ ず み

268

時越半四郎

272

ほほにかかる涙

282

慶安大変記

288

月へ飛ぶ思い

301

あるいは酒でいっぱい海

308

ミスター・サンドマン

310

白き異邦人

313

ベトナム観光公社

320

公共伏魔殿

338

エッセイ

新・SFアトランダム………
359

解説

扇田昭彦

361

馬の首風雲録・ベトナム観光公社

装
幀

山
藤
章
二

長篇馬の首風雲録

1 馬頭型暗黒星雲は戦雲に包まれていた

「とまれ」

と、丁長が叫んだ。

彼はブルハンハルドウンナ長銃を構え、夜の闇をすかし見て大声で誰何した。「何ものだ」

「ドブサラダであります。丁長殿。ただ今戻りました」

街道を市街の方からやってきた兵士は、丁長に近づいて、ブチャラン小屋の土壁にかけた龕燈ぐんどうの明かりの中へ自分の顔をつき出して見せた。

「お前か」

丁長は銃をもとどおり小屋の土壁に立てかけ、尻尾しつぽを股の間へはさみこむと、そのままそこへ、うずくまるように腰を据えた。

街道の右手、ブチャラン小屋の背後には、山に続く森がひろがり、反対側は一面にクチュグルの草原だった。草原ではひっきりなしに虫が鳴き、広葉樹の森の中からはときどきサチルナ、ブチャランゲン、ボロリなどの、野生の動物たちのたてるかすかな音が聞こえてきた。

ドブサラダと名乗った兵士は、あたりの様子を見まわしてから丁長に訊ねた。「奴はどこにいるのでありますか、丁長殿」

「小屋の中だ」と、丁長はいった。「ひどく苦しんでる」

「薬を持ってきたのですが」

「そうか。お前、中へ入って塗ってやんな」

ドブサラダはいやな顔をして、小屋に入るのをためらった。「感染しねえでしようかねえ」

「予防注射は、してきたんだろが」

「はあ、それは」

「じゃあ、いいじゃねえか。早く介抱してやんな。そのためにお前を行かせたんだぜ」

ドブサラダはしぶしぶ小屋の入口へ近づいた。木の一枚戸の手前でふと立ち止った彼は、丁長の方をふり向いて訊ねた。「ところで丁長殿。獲ものはありましたか」

「まだだ」丁長は溜息まじりにいった。「町の奴ら、おれたちがこで徴兵してること、どうやって噂うわさがつけやがったんだろ。くそ。きつと誰かが、ここにおれが立っているのを見て、町じゅう触れ歩きやがったに違えねえ。余計なことしやがって。くそ。通るのは老いばれや女子供ばかりよ。あさっては、シハードの町で市が立つから、必ずここを通る男がいるに違えねえと思つたが、奴ら、女どもを仕入れに行かせやがったんだ。くそ。明日の昼過ぎ

までに一丁隊十五名を編成しなきゃならんというのに、今
んところおれの部下は、お前とミシミシの二人だけだ。こ
れじゃどうしようもねえ」

「このあたりの奴ら、徴兵係と聞けば泡をくらって逃げま
わります」ドブサラダはそう言いながら、丁長の傍へきて
腰をおろした。「私も、徴兵係は三回ばかりやりました。

以前の丁隊にいた時も、つい三カ月ばかり前ですが、シハ
ードの町でやつたんです。いやもう、あの町の奴らもひど
いもんでさあ。とっつかまえて納得させるのに、たいてい
半日はかかりましたもんね。つまり、戦争がどんなに面白
いものかということを言ってお聞かせてやるのがです。それ
も酒場へひっぱりこんで、酒を奢どってやってですぜ。その
金だって自前でさあ。いい機嫌に酔どっぱらわしてから飲み
逃げされたって、こちとら文句もいえねえ。このごろの若
い奴にや、自分に恥じるってことがないんですかねえ」

「平和が続きゃ、誠実さなんてものもなくならあね」と、
丁長はいった。「この辺にや、ながい間戦争がなかったか
ら、道徳も腐くちまってる。平和が生むなあ女みてえに生
つ白い音楽好きの若え男と、ものぐさと、無秩序だけだ。

くそ、このごろの若い奴らときた日にや、ちよつと何かむ
ずかしいことをいいつけてやると、妙にからだをくねくね
させやがって、『ああ、それ、ボク、ヨワいんです』って
言いやがる。しかもそれを恥とも思っていやがらねえ。当

り前だと思っていやがる。コウン・ビ式の自己主張だか何
だか知らねえが、くそ、むかむかする。ふん。『ボク、そ
れ、ヨワいんです』くそ」彼は地面に唾を吐きちらした。

「前の戦争が終つてから、まだ間がねえというのにこのあ
りさまよ。戦争がないうちは誰もかれも自分のいいといこ
とを勝手に喋りまくって、ひどい時なんぞ、そこにいる人
間の数だけの党派ができたりする。こんなのは秩序じゃね
え。女の井戸端会議だ。本当の男らしい男が出てくるなあ、
戦争の時だけだぜ」

「そのとおりですな。戦争を嫌う奴の気がしれません」と、
ドブサラダはうなずいた。

「酒や煙草を初めてやった若僧は、たいていひっくり返つ
て眼をまわし、むせ返る」と、丁長はいった。「戦争つて
奴も初めは咽喉を通しにくい。だけど、一度味をおぼえち
まえばしめたもんよ。ふん。そりゃあ、女どもはバクチや
戦争を厭がるだろうさ。だけど考えて見りゃ、人生だつて
歴史だつて、みんなバクチみてえなもんだ。女なんてなあ、
バカで自堕落だから、手前てのからだを温かいところでぬく
ぬくと腐くらせて行くのが好きなのも当り前だ。だけど、女
にたきつけられて、反戦だの平和だの言う奴の気が知れね
えや。そういう奴らが、いざ危険な時にやあえらそんな理
屈なんかどこへやら、ただ二本の脚だけで考えようとする
臆病者になつちまうってわけよ。そいつらはもちろん女以

下だし、もうビシユバリクの人間じゃ、なくなっちまってるんだな」

「まったくです。丁長殿。戦争がどんなに面白いもんか、若え奴らにもっと、教えてやらにやありませんな」

ふたりはしばらく黙ったまま、虫の声に耳を傾けていた。龕燈の灯が、またたき始めた。

ドブサラダは、やがてゆっくり立ちあがり、また小屋の入口に近づいた。

彼が木の一枚戸を押し開けようとしたとき、丁長が彼に訊ねた。「おい、お前はたしか、コウン・ビ人を見たことがあるっていつてたな」

「あります」ドブサラダはまた丁長の傍にやってきて、その横に並んで腰をおろし、話し始めた。「ずっと以前で、もちろんまだコウン・ビと仲が良かった頃ですが、トンビナイの町で会いました」

「奴ら、どんな恰好をしてるんだ」

「そうですね。恰好はおれたちとあまり変わりません。二本足で立って歩くと、手も二本あります。背丈も、だいたいおれたちくらいです。ただ、奴らには毛がありません。頭に少しと、眉毛がうつすらあるだけで、まあ、のつべらぼうに近い面をしていて、あとは身体中つるつるです。尻尾もありません。おかしい顔つきをしますが、奴らに言わせりゃ、おれたちサチャ・ビの方がよっぽどおかしいそう

で、何でもおれたちは、奴らの国のイヌとかいう家畜に、顔だけ似てるんだそうです。もっとも、この私だけは、ほかのサチャ・ビとちよつと違っていて、キツネとかいう動物に似てるって言ってましたがね。喋りかたは、おれたちよりものろのろしていて、歯切れが悪く、はつきりしません。声も小さくて、リズムがありません」

「いやな奴らしいな」

「いやな奴らです」

ふたりはまた、しばらくじつとしていた。

「丁長殿。龕燈が消えました」

「もう、夜が明けるからいい」

風がなま温かくなってきた。

「今日も暑そうですね」

「暑そうだ」

ドブサラダはゆっくりと立ちあがり、また小屋の入口に近づいた。木の一枚戸を押しあけて中に入ると、壁にぶらさげた龕燈が、部屋の隅に積みあげた乾草の上に、ひとりの兵士の影をゆらめかせていた。この兵士はコロコロの患者だった。

コロコロというのは、この地方の俗語で、伝染性皮膚病の一種のことである。このコロコロにかかると、気の狂いそうな痒さのため、一瞬の休みもなく身体中を掻き続けていずにはいられない。この兵士も、ひっきりなしに全身を

掻きむしりながら、乾草の上でのたうちまわっていた。

「ええい。この、くそいまいましいコロコロめ」彼はわめきちらしていた。「戦争も始まらねえうちから、こんな病氣にかかるなんて、このいやらしいコロコロめ」

彼はすっ裸になり、おどろくべき早さで、二本の腕を動かして続いていた。今、首のうしろを掻いていたかと思うと次は腹、同時に別の手で背中という具合に、その動作のすばやいことは、あきれるばかりだった。彼の全身の白い体毛は、ほとんど脱け落ちていた。それでも彼は絶え間なく血まみれの爪で、皮膚に赤い溝を掘り続けるのだった。表皮や真皮の死んだ組織が、白い粉と黒い塊りになってあたりにとび散り、龕燈のうす明かりの中で、埃といっしょに小屋中に舞いおどっていた。

ドブサラダは、ちょっとたじたとして、ドアの前で立ちすくんだ。

「やめろ、ミシミシ」彼は叫んだ。「よけい悪くなつて、死んじまうぞ」

「ドブサラダか」ミシミシと呼ばれたその兵士は、右手で口の縁のかさぶたを掻き落し、同時に左手で股ぐらをぼりぼり掻きむしりながら叫び返した。「薬は持ってきてくれただろうな」

「ああ、これだ」ドブサラダは、部屋の隅から乾草の上へ薬瓶を抛り投げた。

「塗ってくれ」

「おれはいやだ」ドブサラダは、あとじさりした。「ご免だな。自分でやらなよ。お前塗れ」

ミシミシは薬瓶を拾いあげ、痒さのために時どき絶叫しながら、氣ちがいにじみたスピードで黒い粘り気のある液体を全身にすりこみはじめた。

ドブサラダは、小屋の外に出た。

「もう、塗ってやったのか」と、丁長が訊ねた。

「自分で塗っています」ドブサラダはそういいながら丁長の傍らに腰をおろし、いそいで喋り出した。「あつしも、平和なんてもなあ、もうご免でさあ。面白味なんにもありゃしねえ。だいたい平和なんてものは、ふたつ戦争があるとしたら、その間にあるだましの時期のことでしょうが。だとしたら、戦争よりやあ平和の方が、よっぽど不自然でいやらしいに決まってるさあ」

「だが、やがてこのあたりも戦場になる」と、丁長はいった。「そうなりや、秩序や道義心も回復するだろうぜ」

「敵はここまで来ますかね、丁長殿」

「来るな」丁長はうなずいてそういった。「コウン・ビ人は、必ずここまで来る」

さて、馬頭型暗黒星雲は、戦雲に包まれていた。

この、ふつう馬の首と呼ばれている暗黒星雲は、ひどく

簡単に説明すれば、オリオンの三つ星のひとつ星の近くにあって、散光星雲と隣りあっているガス星雲である。そのため地球から見ると、入道雲が落日を背景にして周囲を金色に輝かせているように見えるのだが、その形が馬の頭に似ているところから、こう名づけられたという。地球の天文学者たちは、多分この星雲の背後に明るい恒星があるために、あのように周囲が光るのだろうと噂していたらしい。で、それは結局西暦三三二七年になって、正しいということが立証された。つまり、M 42・M 43区探険隊というのがこの星雲を迂回した際に、その向う側に二百三十六個の、酸素と水を備えた惑星を持つ太陽の集落があるのを発見して帰って来たのである。

さつそく基地建設隊というのが派遣された。彼らはその周辺部の惑星四個に小さな基地を造営して、お定まりの探険を始めたのだが、これらの惑星群からは知的生命体は発見されなかった。

暗黒星雲内にある惑星が発見されたきっかけというのは、第二次基地建設隊と名づけられた船団のうちの一隻が、迂回するのは面倒とばかり乱暴にもガスの中へ突入して通り抜けようとしたことからである。まあ、もつとも発見とか発明とかいったものは、どこかで何か乱暴なことでもしない限りなかなか実現しないものだが、それはともかく、そのガス星雲の中ほどまで進んだとき、隊員のひとりが四〇

億マイルほど離れた場所にある恒星を発見した。

暗黒星雲の中でさえ発見できたのだから、相当大型の恒星に違いないとかなんとか、その隊員はまあそういったようなことを考え、基地へつくなりそのことを上司に報告した。基地ではこれまた定石どおり星雲内探険隊というのが組織され、ガスの中へ入っていった。その結果、鋸歯状の宇宙の穴とかいう言葉で呼ばれているこの星雲の、非科学的にいえば空間にかかった黒い霧みたいなものは、科学的にいえば、決して有毒ガスではなく、ナトリウムとか、カリウムとか、カルシウムとかいった原子がおそろしく稀薄な集合体になって漂っているにすぎないといったことを知ることができたのである。また、発見された恒星は直径一五〇万マイル、表面温度摂氏八五〇〇度であることもわかった。これは必ず惑星を持っているに違いないと判断した探険隊は、さらに附近の探索を続けた。その結果、筋書どおり人が住むことのできる惑星ふたつが発見され、恒星に近い側の星では、犬に似た知的原住民も発見された。このふたつの惑星というのがビシュバリクおよびブシュバリクであり、原住民というのがすなわちサチャ・ビ族である。書き加えておくと、ビシュバリクはサチャ・ビ語で「暑い星」、ブシュバリクは「寒い星」の意味である。また、後になってサチャ・ビ族たちは地球人のことをコウン・ビ族と呼んだ。「体毛のない人間」という意味だ。

この年、すなわち西暦二三二〇年は、サチャ・ビ族が時の皇帝ハンハンによって統一されてから、ちょうど百年めに当たっていた。こういった歴史的なことは、地球でもどの星でもたいして変りはないのでざっと説明しておく、つまりそれまでの間ビシュバリク上の好戦的な七部族は、互いに他の領土を攻めあい、縄張り争いをくり返していた。やがてその中で最も弱小の部族だったハン族の長ハンハンが政略結婚によって勢力を得、隣国三つの領主と手を握って他部族を制圧し、ビシュバリクを統一したのである。

さて話を戻して、星雲探險隊のうちの二隻の船の隊員が、ビシュバリクの首都シハードの郊外にあるブチャラン牧場に降り立った時、その附近のサチャ・ビ族たちは大いに敵意を見せた。戦後百年といっても、もとの好戦的な血はまだ流れ続けていたというわけである。彼らは隊員たちを殺しこししなかったが、とびかかってひっ捕え皇帝ハンハンの玉座の前にひき据えたのだ。もちろん隊員たちは、相手の武力の幼稚さを見て軽蔑し、わざと無抵抗を装っていたのだが。

皇帝ハンハンはこの時すでに百三十二歳という高齢に達し、よいよいの気があって体力は衰えていたが、頭はまだはつきりしていた。

家来どもが失礼をいたしましたな見知らぬ星のおかたといつて、皇帝は隊員たちに詫びた。お見受けしたところ高

度の文明を持つ星からお出でになったご様子、わたしどもは、あなたがたのような立派な星のかたたちとは、親しくおつきあいたいものと思う、と、まあなかそのようなことをいって、地球のコリーに似た顔つきの皇帝ハンハンは玉座をおり、隊員のひとりひとりと手を握りあって、彼らを歓待した。

と、いうわけで、その翌二三二一年には、コウン・ビとビシュバリクの間に通商協定が結ばれ、その後八年間、両星間に文化の交流が続いた。

たとえば、それまで工場制手工業だったビシュバリクの生産手段は技術革新によって大量生産方式に切りかえられ、また零細農民の集約農法にしても、農耕技術の改善で単位面積当りの収穫量がぐっと増大した。また鉱業面ではビシュバリクにやってきたコウン・ビ族の地質学者や技師によって、あちこちにピッチブレンド・閃ウラン鉱が発見され、以後これはビシュバリクの主な輸出品となった。もちろんビシュバリク内でもエネルギー革命が起り、それまでの石炭石油に依存していた原始工業時代から一挙に核エネルギー時代へと飛躍したのである。

もっとも、こういったことは最初、どこでもそうなのだが、下層階級の生活を改善するまでには到らなかった。むしろ、どつと流入してきたこれらの科学技術や文化は、それまで自給自足体制をとっていたサチャ・ビ族の富豪と貧